

日语研究

第 1 辑

《日语研究》编委会 编

商务印书馆

日语研究

第 1 辑

《日语研究》编委会 编

商务印书馆

2003 年 · 北京

图书在版编目(CIP)数据

日语研究. 第1辑/《日语研究》编委会编. —北京:商务印书馆, 2003

ISBN 7-100-03602-X

I. 日... II. 日... III. ①日语—研究—文集 IV. H36-53

中国版本图书馆 CIP 数据核字(2002)第 078990 号

所有权利保留。

未经许可,不得以任何方式使用。

RÌ YŪ YÁN JIŪ

日 语 研 究

第 1 辑

《日语研究》编委会 编

商 务 印 书 馆 出 版

(北京王府井大街 36 号 邮政编码 100710)

商 务 印 书 馆 发 行

河北三河市艺苑印刷厂印刷

ISBN 7-100-03602-X/H·914

2003 年 3 月第 1 版

开本 787 × 960 1/16

2003 年 3 月第 1 次印刷

印张 16 1/2

定价: 24.00 元

《日语研究》编辑委员会

主 编 彭广陆(北京大学)
副 主 编 徐一平(北京日本学研究中心)
 续三义(北京外国语大学)
主编助理 潘 钧(北京大学)

编 委 (按汉语拼音顺序排列)
曹大峰(北京日本学研究中心)
陈访泽(广东外语外贸大学)
陈俊森(华中科技大学)
冯建新(商务印书馆)
高 宁(华东师范大学)
李庆祥(青岛海洋大学)
林 璋(福建师范大学)
吴大纲(上海外国语大学)
吴 侃(同济大学)
修 刚(天津外国语学院)
徐敏民(华东师范大学)
许宗华(洛阳外国语学院)
于日平(北京外国语大学)
俞晓明(大连外国语学院)
翟东娜(北京师范大学)
张 威(清华大学)
张佩霞(湖南大学)
朱京伟(北京外国语大学)

卷 首 语

近年来,我国的日语学习热方兴未艾,据统计日语学习者已达百万之众,且日语教师也数以万计,其规模相当可观。

另一方面,随着我国日语教学水平的不断提高和我国自己培养的高层次日语人才的日益增多以及一些学有所成的留学人员陆续回国,国内高素质、高水平的日语研究者的队伍已初步形成。我国的日语研究较之前些年有了长足的进步,它主要表现在对日本学者的研究一味地模仿、亦步亦趋的状态已得到很大程度的改善,开始出现一些具有独创性、足以立一家之言的研究。这一明显的改观也已引起日本学界的关注。但是,现在还无法通过一个专门的论集集中反映我国日语研究的新成果。

有鉴于此,我们决定编辑《日语研究》论集,其特点是:面向全国的日语学者(也包括旅居国外的中国学者以及外国学者),公开征集稿件;论文的研究对象涉及日语的语音、文字、词汇、语义、语法、语用、文体、修辞、翻译理论、教学理论等各个方面,同时也包括日汉语言对比研究。经过编委会成员的严格审查(采用匿名审稿制),从中选出学术水平较高、具有独创性的论文予以刊载。力争一年出版一辑,每辑字数在20~25万字;为保证质量,宁缺毋滥。本论集的读者层主要为日语专业的教师和研究生,它也将成为我国日语界与日本的语言学界进行交流的一个重要窗口。

《日语研究》编委会由国内日语研究领域的中青年学者组成,具有一定的代表性。编委会全体成员将为办好这个论集竭尽全力。

为树立《日语研究》的权威性,我们选择由商务印书馆出版,其理由是不言自明的。商务印书馆是国家级出版社,其历史之悠久,实力之强大,出版物水准之高,学术性之强,成就之显赫,影响力之大,是国内任何一家出版社无法望其项背的。况且该社多年来在出版日语的学术著作、译著、教材、期刊诸方面成绩斐然,在日语界也具有举足轻重的地位。

我们相信,有一流的出版社做后盾,经过编委会全体成员的积极努力,在全国及海外同仁们的大力扶持下,《日语研究》一定会办成一个代表我国日语研究水平的专门学术论集,它的编辑出版一定会为我国的日语研究和日语教学做出应有的贡献。

《日语研究》编委会

贺《日语研究》出版

中华日本学会会长 刘德有

在迎接中日关系正常化 30 周年时,《日语研究》问世,这对于全国众多的日语研究者和教学工作者来说,真可谓是“双喜临门”。我作为长年从事对日工作和日语研究的一个“老兵”由衷地感到高兴,并愿借此机会,代表中华日本学会对它的诞生表示热烈祝贺!

《日语研究》,是一本从语言学角度探讨和研究日语的学术论集。这在我国也许是首创之举。毫无疑义,它的诞生是与我国改革开放后高层次的日语人才不断增多,高素质、高水平的日语研究者队伍初步形成这一大背景分不开的。《日语研究》的问世,不仅将为全国的日语研究者发表和展示最新研究成果提供渴望已久的园地,而且它可以成为我们在这一领域开展国际学术交流的重要窗口。这一新生出版物必将进一步推动我国的日语研究,并对中国的日本学发展产生积极作用。

语言是一种特殊的社会现象。语言不是一成不变的,它随着人类社会的发展和社会生活需要的增加,不断用新的词语充实着自己的词汇。如今,人类生存的这个世界发生了极为深刻而又异常复杂的变化:政治多极化、经济全球化的趋势正在继续加强,科学技术革命的深化及信息化、网络化的发展,不断改变着人类社会生活的各个方面。伴随着这一巨大变化,与人类的各種社会活动有直接联系的语言——实际上是它的词汇处于不断变化之中。尽管基本词汇和语法结构没有重大变化,但产生了大量新词,甚至出现了不少新的语言现象。这一情况,日语也并不例外。我希望我们的学术出版物能反映这些变化,从而体现出它的时代感。

语言也是文化。尽管《日语研究》的任务不是研究日本文化本身,但是我们在探讨、研究语言现象时,自然离不开文化,离不开社会文化背景和人

们的心理、心态。如果离开一个具体的社会,离开文化背景和人们的心理、心态,孤立地研究语言现象,就无法真正理解那个语言。我希望我们的学术出版物能重视这一点,多发表一些文化内涵丰富的稿件。

《日语研究》的编委会明确提出,它的研究对象除了日语的语音、文字、词汇、语义、语法、文体、修辞、翻译理论、教学理论等外,还包括日汉语言的对比研究。我认为,这是很有见地的。通过日汉两种语言的对比研究,可以使我们更加深入地了解日汉语言各自的特点,了解中日两国人民的审美观、思维方式和深层心理的异同,从而不仅有助于促进中国的日语研究的发展,而且有助于中日两国人民加强相互间的理解。

在出版方针上,我希望《日语研究》能始终坚持科学性、学术性、权威性。

科学研究,要尊重前人的研究成果自不待说,我们还要通过国际交流,吸收和借鉴别国学者研究的优秀成果。但是我们的研究要有新发现,有创见,有特色,而不是简单地重复、照搬,人云亦云。

日语研究与其他科学领域的研究一样,也应提倡百家争鸣。我们在坚持正确的政治方向的同时,在学术上开展百家争鸣,这有利于问题的深入探讨和研究,有利于我国学术事业的蓬勃发展。我相信——实际上,广大读者也热切企盼,我们的《日语研究》将反映出我国学者在这一领域通过积极开拓而创造的生动活泼的可喜局面。

姹紫嫣红才是春

中国日语教学研究会会长 胡振平

一部研究日语的专门论集《日语研究》诞生了！这是继中国日语教学研究会会刊创立后，日语学界的又一件大喜事！

会刊《日语学习与研究》是一本雅俗共赏的综合性日语刊物，而身为具有专业性特点的《日语研究》，其风格则可用“阳春白雪”四个字来形容。两种个性、两种风格交相辉映，相得益彰。

从事日语教学、研究的教师或研究者们，早就盼望能有这样一块园地了。北外大的《外语教学与研究》、上外大的《外国语》、黑大的《外语界》以及洛外的学报、大外的学报等核心期刊大都以英语研究为主，而日语研究的稿件，往往受到期刊容量等条件的限制，不能如数如期地发表，实为憾事！《日语研究》的创办弥补了我国日语研究的空白，实现了广大日语研究者一直以来的愿望，其意义之重大不言而喻。

值得一提的是，《日语研究》的编委组成清一色的都是中青年教授，他们年富力强，生机勃勃，大部分人都有博士学位，其中一些已是博士生导师，真可谓年轻有为，后生可畏。这标志着我国的日语学界已进入一个新的历史阶段。

另一个特色则是它的编辑宗旨——匿名审稿、择优刊载。这样一来，便产生了它的突出优点：范围宽泛、不拘一格。这为学者们公开公平地竞争提供了方便，创造了条件，使稿件的高质量、高水平有了客观保障。

在此，预祝《日语研究》健康发展，茁壮成长，成为培育日语人才的另一块基地，同时也希望它能与《日语学习与研究》、《日语知识》等日语界的其他刊物成为取长补短、携手共进的好兄弟，共建一片繁花簇锦、争奇斗艳的百花园。

祝贺《日语研究》出版

(日本)国语学会代表理事 山口佳纪

欣闻中国将出版日语研究的专门论集《日语研究》，其编委会汇聚了中国日语研究方面的权威，这一举措在日语研究史上是具有划时代意义的，谨此表示衷心的祝贺。

众所周知，日语在历史上从汉语中吸取了许多养分，其自身也为之发生了变化。因此，研究日语时也需要援用有关汉语的知识。也正是为此缘故，日语研究者迄今为止对汉语语言学的研究成果多有借鉴。然而过去的研究，仅就有关汉语的知识而言，尚不充分。为弥补这一不足，请更多的中国学者参加到日语研究的队伍中来不失为是一种最佳的方法。

另一方面，汉语和日语是在许多方面具有不同性质的语言，这也是人所共知的。因此，我们非常想了解中国的学者是如何看待日语这个语言的。我希望中国的学者能够发现迄今为止人们尚未注意到的日语中的问题，并找到问题的答案。

中国的学者已经在日语研究领域取得了诸多的成果，这是尽人皆知的事实。但是迄今还没有一个专门发表日语研究成果的园地，实在令人遗憾。现在，这个多年的难题马上就要解决了。日语研究正在迎来一个国际化的时代，并将发生重大变化。《日语研究》的问世，必将会对日语研究的发展起到显著的推动作用。

及此，衷心祝贺《日语研究》出版。

目 录

卷首语 《日语研究》编委会(1)

贺词

贺《日语研究》出版 刘德有(3)

姹紫嫣红才是春 胡振平(5)

祝贺《日语研究》出版 山口佳纪(6)

特约论文

カテゴリー的多義の比較 宫岛达夫(1)

论 文

语料库语言学与日汉对比语言学 曹大峰(21)

再论日语主观性形容词客观化的规律问题

——以日汉形容词对比为中心 宋协毅(37)

再论“「デ/ニ」两用型”形容动词 俞晓明(49)

论时间副词“モウ” 孙佳音(66)

ノデハナイ与否定 戴宝玉(90)

动词谓语句中命题否定的范围——以单句为中心

..... 陈访泽、许 贞(100)

可能的意义试论——以非自主动词句与有标记可能句的互

换为中心 贾黎黎(111)

形容词谓语句的“会话含义” 李奇楠(130)

关于日语汉语词的和化问题——课题与方法 潘 钧(145)

福泽谕吉著作中的四字语 彭广陆(165)

中日亲属称呼比较研究	孙成岗、吴宏(186)
略论文体的翻译教学与研究	高 宁(203)
日汉翻译中的宏观把握——两个教学实例	续三义(221)

书 评

评俞晓明著《现代日语副词研究》	徐一平(235)
-----------------------	----------

编者后记	(245)
-------------------	-------

来稿注意事项	(246)
---------------------	-------

カテゴリー的多義の比較

京都橘女子大学 宮島達夫

提要 两个以上的词汇意义的核心部分相同,而与语法有关的意义不同的多义词叫做“范畴多义词”。既是自动词,又是他动词;既表示人,又表示动作,这样的词就是范畴多义词。本文举例说明日汉两种语言的范畴多义现象存在着差异,还指出“酒がすきだ”和“喜欢喝酒”这种表达倾向上的差异。

キーワード カテゴリーの意味,多義語,日中対訳コーパス,感情の対象,学習の対象

1. 「カテゴリー的多義」とは

単語の意味には,その文法現象をささえるようなカテゴリー的側面がある。たとえば,「戸があく」と「戸をあける」とでは,自動性と他動性,つまり,対象にある変化がおこるか,そのような変化をひきおこすように対象に働きかけるか,という点に決定的な対立がある。自動詞と他動詞のちがいを「を」格の名詞をとるかという点にもとめるならば,それ自体は文法形式の問題だが,そのような文法的性質をささえる意味の側面があるはずであり,これをカテゴリー的とよぶことができるだろう。

意味のどのような要素をカテゴリー的とよぶかの判断はむずかしいが,われわれが問題にしているのは論理学ではなく言語学なのだから,なんらかの点で言語形式に反映していることが条件になる。「荷物を棚にあげる」は空間的な移動で「～に」という帰着点を取り,「例をあげる」は表現活動でこれをとらない。このようなばあいには「あげる」のカテゴリー的な意味がちがう,といえるだろう。言語形式としては,このような文法

形式以外にも、どのようなグループの単語とむすびつくか、という連語的な条件も考えるべきである。ただ、いまのところ、わたしにはこの問題をひろく考察して一般的な結論をだす用意はない。

ところで、あるばあいには、おなじ単語のなかに2つ以上のカテゴリーが共存していることがある。「戸がひらく」と「戸をひらく」とをみると、おなじ動詞が自動詞としても他動詞としても、つかわれている。つまり、この動詞はカテゴリー的に多義なのである。ただし、ここでは「カテゴリー的多義」ということばを単にカテゴリー的な意味を複数もっているというだけでなく、それ以外の語彙的意味がほぼ共通であるもの限定してつかう。上の例でいえば、「あげる」は2つの語彙的意味が全面的にちがうので、ここではカテゴリー的多義とはよばない。

2. 調査資料

以下、日本語と中国語のあいだにある〈カテゴリー的多義〉の対応について述べるが、この調査の資料は、おもに「中日対訳コーパス(試用版)」による。これは北京日本学研究中心で曹大峰氏を中心として作成中のものであり、まだ完成品ではないが、わたしも、その研究協力者として利用がみとめられている。つぎに、作品と訳者の名まえをあげる。ただし、いくつかの作品については、複数の中国語訳がコーパスに収録されており、原則として、最初にあげられた、以下の訳者のものをつかったが、第2・第3の訳をも利用したばあいがある。また、参考のために英語の訳文も引用した箇所があるが、これらはコーパスにふくまれているのではなく、別にさがしたものである。

安部公房「砂の女」(楊応辰訳, E. D. Saunders 訳)

石川達三「青春の蹉跌」(金中訳)

泉鏡花「高野聖」(文潔若訳, Ch. S. Inouye 訳)

井上靖「あした来る人」(林少華訳)

井伏鱒二「黒い雨」(柯毅文等訳, J. Bester 訳)

大江健三郎「飼育」(沈国威訳, J. Nathan 訳)

乙武洋匡「五体不満足」(鄧顥訳)
 川端康成「雪国」(葉謂渠訳, G. Seidensticker 訳)
 島崎藤村「破戒」(柯毅文訳, K. Strong 訳)
 太宰治「斜陽」(張家林訳, D. Keene 訳)
 谷崎潤一郎「痴人の愛」(郭来舜等訳, A. H. Chambers 訳)
 夏目漱石「こころ」(周大勇訳, E. McCellan 訳)
 夏目漱石「坊っちゃん」(劉振羸訳, U. Sasaki 訳)
 平川祐弘「マッテオ・リッチ伝」(徐一平等訳)
 水上勉「越前竹人形」(呉樹文訳)
 武者小路実篤「友情」(馮朝陽訳, R. Matsumoto 訳)
 村上春樹「ノルウェーの森」(林少華訳, A. Birnbaum 訳)

朝日/人民日報「日中飛鴻」
 阿城「棋王」(立間祥介訳)
 王蒙「応報」(林芳訳)
 浩然「輝ける道」(神崎勇夫訳)
 謝冰心「女の人について」(竹内実訳)
 莫言「赤い高粱」(井口晃訳)
 茅盾「霜葉紅似二月花」(立間祥介訳)
 楊沫「青春の歌」(島田・三好訳)
 劉心武「鐘鼓楼」(蘇埼訳)
 老舍「駱駝祥子」(立間祥介訳)

このコーパス以外に使った資料としては、

黒柳徹子「窓ぎわのトットちゃん」(朱曉蘭訳, D. Britton 訳)
 がある。

3. 品詞の差

同形で品詞がちがうものは、カテゴリー的多義語の1つの型である。
 中国語の品詞の認定はむずかしく、名詞と動詞で同形のものがおおい。

日本語でも名詞とナ形容詞(いわゆる形容動詞)で同形のものがある。

○ 奥さんの幸福を破壊する前に/在破坏太太的幸福以前/Before he could destroy his wife's happiness(「ころ」)

○ 健康は必要だが/它们需要健康/health is necessary(「友情」)
の「幸福」「健康」は名詞で、

○ 先生は事実果して幸福なのだろうか/他实际上是否真的幸福/
Was Sensei indeed happy? (「ころ」)

○ 身体が健康になるから/因为你身体健康/When you are healthy
(「友情」)

の「幸福」「健康」はナ形容詞である。対応する中国語も、同様にカテゴリー的多義語であろう。

4. カテゴリー的多義の言語差:(1)組織と行動「学校」

言語の対照研究は文法や音韻をあつかうことがおおいが、単語の意味構造の対照も興味のあるテーマである。日本語でも中国語でも英語でも、おそらくその他おおくの言語でも、空間をあらわす単語は時間的な意味に転用されやすく、両方の意味をもつ。

ながい川	—	ながい時間	很长的河流	—	很长时间
駅にちかい	—	六十にちかい	离车站很近	—	年近六十
銀行のまえ	—	出発のまえ	银行前面	—	出发前
机と壁のあいだ	—	8時と9時のあいだ	桌子和墙壁之间	—	八点和九点之间

つまり、これはある程度の普遍性をもった現象である。ただし、あくまで〈ある程度の〉であって、意味変化がいつも平行しているわけではない。「ながい戦争」を中国語に訳すと「很长的战争」にはならず「长期的战争」になるようである。

ここでとりあげたカテゴリー的多義性についても、ちがった言語で共通にみられるものがある。たとえば、ある団体・組織は同時に建物であり、場所であることがおおい。

「会社(銀行・警察)が～を決定した」というとき、それは、主体的に行動ができる人の団体・組織である。

○ どの学校へはいろいろ/进什么学校为好/which school was the best for me. (「坊っちゃん」)

という例は、学校という組織の1員になる、ということである。ところが、おなじ「学校へはいる」という表現でも、子どもが学校のグラウンドへ遊びにはいるときには、それは空間である。「会社(銀行・警察)へはいる」でも、おなじである。

○ 落ちた奴を拾ってきて、学校で食う/捡落在地上的栗子带到学校里吃/Gather the brown nuts on the ground; these I would take to school to eat. (「坊っちゃん」)

は、空間としての「学校」の例である。また、

○ 学校の二階から飛び降りて/从学校的楼上跳下来/I jumped down from the second story of the schoolhouse(「坊っちゃん」)

は、建物としての学校である。「会社(銀行・警察)がやけた」も建物である。

ここまでは日本語の「学校」と中国語の「学校」が平行している。ところが、日本語の「学校」には〈学校〉のする行動としての授業をあらわす用法がある。

○ 学校は八時に始まる事が多い/学校大多是八点上课/Many of our morning lectures began at eight. (「ころ」)

このばあいには毎日の仕事としての授業だが、つぎの例は休み明けの新学期を意味する。

○ その内学校がまた始まりました/不久,学校又开学了/Our holidays were at last over. (「ころ」)

この「学校」は

○ 学校の授業が始まるにはまだ大分日数があるので/离学校开学还有许多日子/There were many days left before the beginning of terms(「ころ」)